3　調査結果の総括

【国語】

どの学年も「学力のレベル」の下位層の割合より上位層の割合の方が多く、国語を比較的得意としている児童生徒が多い。しかし、学年が上がるにつれて「学力のレベル」が最上位の児童生徒の割合が大幅に少なくなる。児童生徒の言語能力が螺旋的に高まるよう、各学年の学習指導を孤立させず、系統化した効果的な指導がなされることが求められる。

【算数・数学】

平成３１年度と比較して、各学年とも最下位の「学力のレベル」に属する子どもの割合が増えており、低学年の学習内容の定着に大きな差が生じていることが分かる。低学年でのつまずきをそのままにしないことが重要であり、既習事項と関連付けた指導を意図的に行うことが必要である。一方、上位層の児童生徒は、学年が上がってもその割合の減少が少ないため、知的好奇心を刺激する発問の工夫等、上位層の児童生徒をさらに伸ばす手立てを講じるなど、個別最適な学びの実現が重要である。

【質問紙】

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善、学習意欲や自己肯定感の醸成及び家庭学習の充実等が学力向上に与える影響が大きいことから、引き続き、「ふくしまの『授業スタンダード』」や「ふくしまの『家庭学習スタンダード』」を基に、児童生徒の資質・能力の育成を図っていくことが重要である。